



左から藤本壮介氏、池上一夫氏、隈研吾氏、乾久美子氏。撮影：新建築写真部

写真提供：新建築写真部

集合住宅における公共性

——『10の違うものが集まる100戸の集合住宅』 長谷工 住まいのデザイン コンペティションへ向けて

隈研吾×**乾久美子**×**藤本壮介**×**池上一夫**

――『10の違うものが集まる100戸の集合住宅』

今年で4回目を迎える「長谷工 住まいのデザイン コンペティション」。2007年に長谷工コーポレーション創業70周年を記念して第1回が開催され、毎回集合住宅を取り巻くさまざまな問題を考えてきました。第1回「300人のための集合住宅」では密度を、第2回「30年後の集合住宅」では時間に対する変化、第3回「30戸の住宅から生まれ変わる集合住宅」では建て替えをテーマとしました。第4回となる今回のテーマを決めるにあたり、今、集合住宅で考えられることなどを審査員の方々に話し合っていました。

（編）

敷地の重要性

――まずこれまでの3回の審査を振り返り、気がつかれたことはありますか。

乾 周辺の環境が読み取りやすい敷地や歴史ある土地が敷地になるとおもしろい案が出てくると思いました。昨年、そのような敷地を設定したところ、かなり細部まで考えられた案が集まり、従来のアイデアコンペを超えているような印象を受けました。このコンペは応募案にかなりリアリティがあります。これほどしっかり図面を書いている案が集まるコンペはなかなかありませんよね。

隈 そうですね。集合住宅は具体的な場所で考えることが重要ですね。このコンペは先鋭的なアイデアと、具体的な敷地と、長谷工という具体的な会社の出会いが新鮮で、その特質は今回も生かした方がよいと思います。今いるんな大学で教えていても、建築はアートだと考える学生が多くなってきたように思います。そのため具体的に考える習慣が減っているんじゃないでしょうか。たしかにアートと建築の境界は次第になくなってきているのですが、だからこそ具体的に考えないと建築にもアートにもならない。建築を具体的に考えた、リアリティのある提案がおもしろいですね。

藤本 前回の課題で特におもしろかったのは、「集合住宅」をつくる、ということに留まらない広がりがあったことです。街のリノベーションとも取れるし、戸建て住宅の新しい集まり方も取れる。そういう広がりの中から、都市の中での新しい生活のリアリティのようなものが見えてきた気がしました。

先ほどの乾さんのお話にも繋がりますが、場所が抽象的だと、集合住宅の設計というのは、どうしてもその敷地の中での閉じたゲームやパズルのようになってしまいがちだと思うんですね。それではつまらない。集合住宅という概念自体を問い直して再定義するような思考が見られるとおもしろいと思います。生活が変わる身体的な実感と、抽象的な建築思考が両立するところが見てみたいです。

池上 今までの応募案はバリエーション豊かでよい発想がたくさん見られました。ただ、もう少し具体的なところまで考えられているものも期待しています。毎回周辺の環境との繋がりがや与条件から案が導かれることが多いので、今回も敷地は相当大事になるでしょうね。

持続可能な暮らし

――では今、集合住宅を設計する上で、考えなければならぬことは何でしょうか。

池上 持続可能な建築というものが注目されてきて、持続可能なハードとしての建物・設備は具体的に見えてきています。しかし、ハードが整ったとしても、そこでの暮らしは将来どのように変わっていくのか。いくら建物だけが残っても、そこで生活できなくなっては意味がありません。つまり、将来にわたって住み続けられる住まいをどうすれば考えられるのかという懸念があります。もっと地域との繋がりがや、地域の人たちとの共同生活的な要素を取り込んだ集合住宅というものが考えられないか。そこにはいろんな他者が関係してくると思えます。ぜひ学生のフレッシュな頭から、私たちのヒントになるようなものが出てきてほしいと期待しています。

乾 持続可能な建築を地域との関わりで考えると、集合住宅は都市のひとつのインフラとして使われなければならない。それが地域に還元できる方法だと思えます。

隈 持続可能性という和普通はCO2排出量の計算や、太陽光パネルを付けようという話になってしまい、人間の日々の生活にまで立ち立ったことは

ほとんど議論されません。つまり太陽光パネルだけを付けても、それは本来の持続可能性とは違うだろうと思います。このコンペがそういう安易な考えでつくられた集合住宅に対する批判になればおもしろいですね。建築を一種の場やフレームとして捉えて、そこに消費の対象物が流れていくようなアメリカ型、20世紀型の消費社会とは違ったものが建築のプランに反映されているような案を見たいと思っています。モノがフローしていくのではなく、モノと一緒に人間が朽ちていく感じがほしいですね。

乾 そうですね。生活の本質に入り込む提案をするなら、いかに無理をしないか、生活に溶け込むかということがポイントでしょうね。現在、持続可能性を実現するために使われるアイテムは商品化・パッケージ化されたものが多く、それらは賞味期限が短くなるケースが多いように思います。それはパッケージとして完成されすぎているからか、生活においてどこかしら不自然な感じのものだからではないでしょうか。だから自然な形で生活にフィットできる何かを見つけることが重要です。

藤本 集合住宅での生活というものが、なんとなく想像がついてしまっているところところが問題だと思います。そこにただエコを付け足していくようだとつまらない。持続可能性という新しい価値観を踏まえて、集まって住むこと、都市に住むこと、何かを共有するということがどう変化していくか、そして建築がどう再編成されるのか、というところを考えたいですね。

池上 高齢化が進んだ団地のように、同じような世代の人たちがある時期過ぎたらそれで終わりではなく、そこに他の世代やライフスタイルを持つ人が常に入ってこられるような器としての集合住宅が、今回のコンペで見られればよいと思います。

公共性をいかに取り入れるか

――では皆さんが実際に集合住宅を設計する時は、どのような点に配慮しますか。

隈 僕は場所のことをいつも考えますね。もちろん集合住宅以外でも考えなければなりません、

ほとんど議論されません。つまり太陽光パネルだけを付けても、それは本来の持続可能性とは違うだろうと思います。このコンペがそういう安易な考えでつくられた集合住宅に対する批判になればおもしろいですね。建築を一種の場やフレームとして捉えて、そこに消費の対象物が流れていくようなアメリカ型、20世紀型の消費社会とは違ったものが建築のプランに反映されているような案を見たいと思っています。モノがフローしていくのではなく、モノと一緒に人間が朽ちていく感じがほしいですね。

乾 そうですね。生活の本質に入り込む提案をするなら、いかに無理をしないか、生活に溶け込むかということがポイントでしょうね。現在、持続可能性を実現するために使われるアイテムは商品化・パッケージ化されたものが多く、それらは賞味期限が短くなるケースが多いように思います。それはパッケージとして完成されすぎているからか、生活においてどこかしら不自然な感じのものだからではないでしょうか。だから自然な形で生活にフィットできる何かを見つけることが重要です。

隈 公共性を取り入れるというのは単に1階に地域のギャラリーや図書館を入れるということではなく、もっと別の方法のことでしょね。1階ロビーのつくり方、中庭や広場のつくり方だけでも公共的な性質は出てきますし、空間の性質は変わります。たとえば公共性を「公園」や「ベンチ」といったものに読み替えることもできる。そこにおもしろい提案があれば評価したいと思いますし、そういう身近なものからもリアリティが出てくるのではないのでしょうか。

藤本 そうですね、公共という言葉はちょっと硬い響きを持っていますが、本来はもっと僕たちの身体に近いものであっていい。単にその集合住宅に住む楽しさだけではなく、それが街にあることで生まれる楽しさのようなものでしょうか。公共という言葉をしなやかに再定義するような案が出てくると嬉しいですね。

「違うもの」が集まる

――では今回のテーマについては何かお考えはありますか。

隈 戸数という規模の問題だけではなく、集合住宅を構成するすべての要素をテーマにすると今までにない案が見られるかと思います。その要素もプログラムや機能だけに限定せず、身近な物な

ども含め幅広く考えられるテーマがよいのではないのでしょうか。

乾 そうですね。「違うもの」が集まってそれらが集合住宅をつくるのはおもしろいと思いますし、色々なレベルで考えられるテーマになると思います。では「違うもの」の数はいくつがよいでしょうか。あまり多すぎると難易度が上がって、抽象的な案が増えるかもしれません。

隈 たとえば100となると無限に近い数字になりますが、抽象的な案が多くなりそうな気がします。しかし、10ならばひとつひとつ顔が見えて具体的に挙げられるでしょうね。応募者がきちんと説明できるくらいの数の方が、漠然としたものが無数に出てくるよりもよいと思います。また、案を成り立たせている要素の数まで指定するようなコンペは今までなかったのでおもしろいのではないのでしょうか。

池上 でも、今回も案のリアリティは必要でしょうね。規模を設定することでそれが可能になるかと思いますが、たとえば100戸くらいではどうでしょうか。

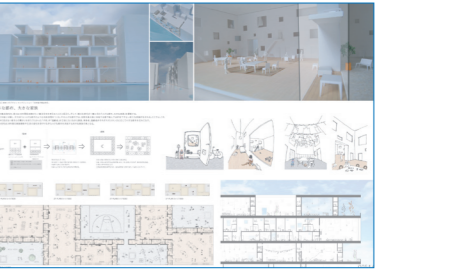


第1回「300人のための集合住宅」最優秀賞「300人のランドスケープ」高池葉子（慶應義塾大学大学院）＋瀧浅崇史（慶應義塾大学）

隈 戸数という規模の問題だけではなく、集合住宅を構成するすべての要素をテーマにすると今までにない案が見られるかと思います。その要素もプログラムや機能だけに限定せず、身近な物な

ども含め幅広く考えられるテーマがよいのではないのでしょうか。

乾 そうですね。「違うもの」が集まってそれらが集合住宅をつくるのはおもしろいと思いますし、色々なレベルで考えられるテーマになると思います。では「違うもの」の数はいくつがよいでしょうか。あまり多すぎると難易度が上がって、抽象的な案が増えるかもしれません。



第2回「30年後の集合住宅」最優秀賞「小さな都市、大きな家族」富山晃一＋岩元俊輔＋津野田祐基（鹿児島大学大学院）



第3回「30戸の住宅から生まれ変わる集合住宅」最優秀賞「やねの森 roof forest」井手口航 磯部隆一 山口貴司（慶應義塾大学大学院）

隈 戸数という規模の問題だけではなく、集合住宅を構成するすべての要素をテーマにすると今までにない案が見られるかと思います。その要素もプログラムや機能だけに限定せず、身近な物な